

いまに伝えたい 宿の先人たち。

私たちが暮らす宿地区は、歴史的にも由緒ある地域でした。その四日市場宿に生まれ暮らしながら、多くの先人たちが奮闘努力してくださいました。今日あるのも、先人たちの成果といえるでしょう。

もちろん地域は、多くの人たちの努力によって支えられてきた事実なしには成り立ちえません。ここでは宿の発展に務められてこられた方々をご紹介します。そして紹介する方の末裔の方々は、宿でいまでも暮らしておられます。簡略な紹介ですが、あらためて、その遺徳をしのびたいと思います。

1 村山貞之助 さん

1886年（明治19年）四日市場に生まれ、その後宮城県師範学校を卒業し、中新田小学校などの先生をしました。さらに鳴瀬小学校、清水、色麻小学校、そして中新田小学校の校長を務めました。

1925年（大正14年）に病気で辞められた後は鳴瀬村教育会長、公民館長、などを務め、1951年（昭和26年）鳴瀬村村長になりました。

何よりも村山貞之助さんを語る時に欠かせないのは「加美郡誌」作成のために、十余年にわたり、調査や編集にあたりました。さらには「中新田町史」編纂委員長として献身的な努力を重ねられて完成させました。このように郷土の調査研究に力をつくされています。

当時のことについて貞之助さんの娘である村山光（てる）さんは次のように書いています。

「父は、町史編纂委員を拝命した時、76歳、完成したのが79歳であった。よくも頑張り通し、最後まで調査と執筆を全うしてくれた。父は考古学専門でもなく、一介の小学校教員あがりの身で、唯々郷土愛にもえ、責任感と、町民の手でまとめることが町民に愛される結果になるのだとの信念で、年老いても向学心にもえていた。」いまでも「加美郡誌」「中新田町史」とともに加美町の歴史を語る時には不可欠な資料文書となっています。1978年（昭和53年）3月、91歳で亡くなりました。



3 花山 文雄 さん

宿集落では「おしょさま」で知られる積雲寺の住職二十九世です。私たちににとって昭和の積雲寺といえはなつかしいお顔です。明治29年7月、広原村の生まれ。広原小学校高等科を卒業、大正2年3月に郡立加美蚕業学校を卒業後、四日市場の積雲寺で仏道修行を行い、大正5年に積雲寺の住職を拝命しました。昭和11年初会結制修行、昭和15年司法保護委員、同17年少年教護委員、昭和27年から民生委員をつとめました。長男信悦氏は仙台市北山輪王寺で修行後、積雲寺を継ぎ、文雄さんは現在住職の護法さんの曾祖父にあたります。鳴瀬小学校は積雲寺で四日市場小学校としてはじまりました。



5 工藤栄治郎 さん

明治12年生まれ。四日市場小学校初等科に入り、22年鳴瀬尋常小学校を卒業、中新田小学校高等科に入学。26年卒業。大正2年村農会総代に挙げられ以降四期継続。大正14年に宿の区長に選任され三期務めました。在任中荒屋敷橋の架設、宿区青年会館新築、農道改修整備に力を注ぎました。昭和29年中新田、広原の合併により、新しい中新田町が発足、町会議員をつとめました。区長、議員、助役などの多くの団体役員を歴任しました。

このように地方自治行政に関与して多くの功績をあげたために、総理府統計局長、農林省調査部長、宮城県知事、などから多くの感謝状や表彰を受けました。



7 千葉俊之助 さん

明治8年東宮の越千葉俊吉の二男として生まれました。明治31年に宮城県尋常師範学校を卒業。鳴瀬小学校で教鞭をとりました。後に東京高等師範学校に入学。明治38年卒業後は教育数学及び物理の師範学校、中学校、高等女学校の教員免許状を受け、青森県立第二中学校の教諭となり、その後に病気で休職。

明治44年37歳の若さで他界しました。当時の教え子たちによると「性温厚着実にして真摯謹厳にして冒すべからざる威容あり。而も情に厚く親切人々より厚き信頼と畏敬を受けた。」とふりかえっています。



2 宮野 謙三 さん

1880年（明治13年）に鳴瀬村の初代村長をした宮野右門の二男として生まれました。

1906年（明治39年）に中新田、鳴瀬、広原三地区の連合の耕地整理組合の事務をとりました。

1927年（昭和2年）に鳴瀬村会議員を二期つとめあげ、1930年（昭和5年）からは四日市場耕地整理組合の副組合長になり、鳴瀬地区の事業を完成させました。（これらは今の鳴瀬地区全体の区画整理のようなものも含み、現在の農業用地の基本となったものです）翌年1931年（昭和6年）から鳴瀬村村長を務めました。この時期、鳴瀬小学校の建設が決まりました。この決定により鳴瀬村を二分する形で立地をどこにするかで大変な争いになりました。小学校は下新田地区に決めて、校舎建設を行いました。村長はこの建設中に、つねに反対する側からの襲撃から身を守るために、自分の懐に小刀をしのばせながら、校舎建設の材料を吟味して選び、工事を自ら見張るなどして完成させました。このことは村人には大きな話題となりました。昭和8年当時珍しい洋風の建築物で、丈夫な木材の校舎が新築されました。後年、校舎はそのままでの木材料を活かして「中新田交流センター」として活かされています。



4 千葉 文雄 さん

鹿島神社の千葉家は代々神職をもって家業を伝承した名家です。大正11年生まれ。文雄氏は五十二世宮司。鳴瀬小学校に学び、さらに上級学校を望んだが父母を助けて家事の農業に従事することになりました。生来絵画の素質をもっていたので農業の傍ら、独学で絵画を勉強。その後もいろいろな方の指導を受け、絵画の才を磨きます。東北美術展に初出品して入選。しかし第二次世界大戦のため、21歳の時応召され、3年後終戦と同時に帰郷しました。家業の農業をつづけながら仕事の合間に筆をとる生活を続けました。21年東北美術展が「河北展」に改称、その一回展に画題「田植に出る」を出品入選しました。以来九回連続して入選を重ね、特に第五回入選作品「春耕」は駐留軍、宮城軍政府に買い上げされはるか海を越えてアメリカに渡りました。かつて鹿島台のわらじ村長として知られる鎌田三之助翁から「農村画人として国の基である農耕田園風景を主に資材として農民の労働の尊さを都会人に紹介することに努力せよ」と励まされたといいます。

昭和34年宮司に就かれて以来、農林統計調査員、国勢調査員、公民館運営審議委員、また中新田町史編纂委員となり東奔西走の活躍を続けました。長男は、現在宮司の國彦さん。



6 田中 主税 さん

明治36年父喜七郎、母みよしの長男として生まれました。大正7年鳴瀬小学校高等科を卒業後は農業に従事しました。父親が病弱のため、幼い時からその父に代わり母を助けて農業を行ってきました。23歳の時に結婚。若くして農業会総代当選二回、また農業協同組合の設立にも尽力して、後に理事や監事に当選、産業経済の発展、運営にあたりました。鳴瀬村会議員には二回当選、その後合併した中新田町の建設には町会議員として尽力するなど、地方行政の伸展向上に多くの功績をもっています。また養蚕実行組合、養蚕農業協同組合の理事組合長として養蚕業の発展に尽くしてきました。そんな主税氏は、いつも温厚な性格で、人と接する時も、温顔で多くの人に慕われてきました。いまでも主税さんの優しい顔を思い浮かべる人が多いようです。



地域の取り組みピックアップ

現在、全国各地の集落や町内会、自治会で取り組まれている事例を参考にアレンジしてピックアップしてみました。宿地域でも可能なプログラムにアレンジしてみれば実現できるかもしれません。紹介するのは、あくまで参考事例として。

「いくつになっても役割がある地域」をモットーに高齢世代で運営する店を始めています。

これははじめから毎日するのではなく、週末だけとか月のうち4のつく日だけとかで、食べ物や食事をサービスする運営組織体をつくります。やり方によっては、スイーツを開発、創作して販売します。

「おにぎりやさん」「地元産の材料の食事サービス」「宅配サービス」、「高齢者への弁当食事サービス」、若い世代が中心になり「地元仕様ビスケット＆クッキー販売」、「地元野菜のキッシュ＆スープ食事会」とかを開設してみてもいいかが。

月1回の「しゆくカフェタイム&おしゃべり会」を開催します。

集まってコーヒーを飲みながら、テーマを決めてお話し合いをする会。コーヒーはちゃんと淹れたコーヒーをいただく会。毎回ゲストをお呼びしてお話し会をする。定例化して人気のある地域もあります。

例えば地元新聞社の記者さんに最近の町の話題とその真相を披露していただく。また地元在住の方から多少専門的な話題を中心にトークしてもらう。



宿地区には、ちゃんとコーヒーを淹れて、クッキーも焼ける強力な人材もいると聞きます。その方に協力いただいて実施するのも地域人材の活性化には有効かもしれません。開催時は有料としてお茶代をいただきます。主催者を決めて、その方の名前で「〇〇カフェ」と名付けます。

みんな集まって「四日市場甚句リニューアルプラン」を考えてみる。

地元の文化資源として重要な意味を持つ「四日市場甚句」。そのアレンジを考えてみます。まず四日市場甚句の歌詞をすべて覚える作業を定期的に行う作業をします。地元の人が歌詞をちゃんと覚えていることは基本条件です。定期的に集まって歌詞を覚える練習をします。さらに踊りに新しい振り付けを考えてみます。若い男性や女性が踊りに参加しやすいように形態も考えます。近年のスタイルでは若い世代が参加しやすいようなダンシングスタイルのアレンジをして振り付けるなどの案も考えられます。また四日市場甚句の歌唱大会を開催するなどもあります。

宿の全戸に歌詞と歌を吹き込み音源を配布するなどやり方はいろいろですが、地域内普及活動をまず徹底するところから始めます。

そのために集落の集まりなどの際に必ず甚句の斉唱を実施するなど定例化します。これはある地域での民謡普及活動で行われたもので、要はこれくらい徹底してやらないと、地域の文化として根づくモノにはならないということです。

定期的に開催する地域の歴史・伝承を学ぶ講座を開設します。

いわゆる地元の歴史や文化などを自主的に地域の人が学ぶ講座です。これは知っているようで意外と知らないことが多いのです。特に江戸時代、この地域はどうなっていたか、自分の先祖はどこからきて何をしていたのか、などいわゆるファミリーヒストリーを追いかけると地域の昔が見えてきます。さらに苗字をさぐるとなぜこの地域に同名の家が多いのかなどがわかってきます。人は地域をはなれて生きていないということの証です。ある地域では苗字をもとにルーツを通して地域おこしをはじめています。例えば今年は「田中まつり」来年は「佐々木まつり」とか、その中身はさまざま楽しんでいく地域もあります。

鳴瀬全体ではかつて鳴瀬小学校の校長をされていた渋谷伝雄先生に鳴瀬の歴史をお話していただいたことはあるようです。意外と地元の歴史的な話について地元民が知らないことも多いようです。地域を学ぶとこの先なにをするのかのヒントが見つかることもあります。

「小・中学生たちが楽しく勉強するしゆく塾」を開講します。

夏休みや春休みなどに子どもたちの勉強会を行います。例えば夏休みなら朝7時から45分間勉強プログラム2本程度を用意して、プロの講師をお願いしたり、また地域在住者でレクチャーの可能な方たちをお願いします。担当者への謝礼は集落で手当てします。子どもたちに学びの楽しさを教えながら、実質的な「成績向上」をめざします。これらの延長上に、学校では教えてもらえない「地域学習」も行い、神社やお寺の方に、歴史や言われ、風習などを語ってもらいます。



関東のある小さな町で実際に行われている事業があります。

集落の自主事業としての「ガソリンスタンド」経営。これはすぐに出来るものではありませんが、運営資格者を地域でフォローして免許をもち、集落民のためのG Sを運営します。すべて独立して運営するのではなく、他の集落民と共同で連携して運営することもあり得ます。

この方法で集落の方々にいろいろなライセンスを取得してもらい、それを生かす場として地区を活用してもらう場をつくります。最新例では、農家の人が「気象予報士」の資格をとって、地域農業へ予報しています。



集落内に店舗を設けて「生活品ショップ」を運営します。

食品から日用品まで扱い、いわば「集落のコンビニ」を運営するものです。このようなお店を運営している所は全国的に多く、宮城県では丸森町に似た運営体があります。沖縄では集落ごとにこのような地元ショップが多くあります。地元の人が、すぐそばにスーパーやコンビニがあるから大丈夫だ。と言っているうちは実現しません。自分たちの生活する地域で自分たちが出資して店を作るという地域経営母体で考えていく運営方法です。高齢化が進むと買い物がいちばん大変になってくるといいます。その対策案でもあります。

ある町では、ここでだけでしか売っていないオリジナル商品をつくり並べていて、遠くからわざわざ買いに来る人もいるような店もあります。

地元で手に入れやすい材料であらたに地域づくり。

実際にある事例として、集落の竹工芸制作と竹加工による地域密着したモノづくりがあります。

地域内で竹林を所有されている方に協力いただき、材料の竹を使って、竹工芸、美術アート作品を作ります。子どもから大人まで、地域外の方も自由に参加できる方法で、専門家の指導をいただきながらアート工芸品を製作します。竹アートを使い、宿集落内様々な場所に展示して見てもらいます。

さらにお盆の時期に合わせ竹の行燈のようなものを製作し、寺境内に並べ盆火供養をします。可能ならば、近くにある公園に灯籠を並べて供養会を行います。参考になるのが京都の夏の風物詩「京の七夕」です。

地元ミュージアムの開設でかなりの動員策をはかります。

地域の人は地元の人材については、あまり関心がないということがあります。かつて鳴瀬村の村長の村山貞之助さんの弟さんで墨絵画家として有名な河合敏雄さんがいます。この方の作品は、かつて「墨絵美術館」として展示されていましたが現在は中新田交流センター内に移設されています。河合さんが師事されたのは藤島武二や熊谷守一というわが国でもトップクラスの画家でした。例えば、この指導した両画伯と河合氏の関連からふたりの作品を特別に展示する。そのために宿のどこかで展示会をすとかで、宿地区に多くの方を呼び込むこともできます。実現すれば全国から人が集まります。ならば県立美術館の協力で宿で何としても開催するという意思が問われます。



たとえば「宿に宿泊させる施設」や「空き家をリノベーションして人を呼び込むビジネス」などの農村地域活性化計画もあります。

実際に行われているケースとしては比較的多い事業です。ただしクリアするための条件として、運営するノウハウが必要です。宿に呼び込み宿泊まりさせて、食事を提供するまでの動きを事業として「経営」していくとなるとハードルが高くなります。例えばこの地域で動きを作るには地元民の運営力と運営資金が必要になってきます。この先にいろいろな人たちとつながるために、例えば金融機関と交渉する作業、自分たちからプレゼンして資金協力を依頼するノウハウなど、さらにネットワークをつなげて、都市の人達に売り込む作業が必要です。そのためには、いま最も重視されているのはデジタル化での情報化戦略です。それには比較的若い世代による動きづくりが求められています。

地元では、都市とつながるために、自分たちでセールスすとか、資金協力を依頼してまわるとかの行動が求められます。このあたりの動きづくりは、すでに取り組みが行われている地域から話を聞く必要があります。

また山形、岩手県では若い世代が中心になり自分たちの農村活性化の動きづくりを積極的に行ってそれなりの成果を上げている所もあります。子どもの減少、高齢者の増加で「過疎」集落になっている宿地区こそ、生き延びるための戦略が不可欠です。